

# 平安時代の女流自照文學に見られる物の怪 の用例考察

金賢貞\*

---

## 目次

---

1. 序
  2. 女流隨筆文學に見られる物の怪の用例考察
  3. 女流日記文學に見られる物の怪の用例考察
  4. 結
- 
- 

## 1. 序

私は物の怪や鬼などの存在が平安時代の作品の中でどのように現れているのか、また人々にとってどのような意味を持つものであったかについて長い間研究してきた。最初は『源氏物語』の物の怪についての研究からはじめ、今はそれだけではなく他の平安時代の作品全体にかけて研究している。この物の怪という言葉は平安時代以前の作品には見られない。平安時代に入ってから、物の怪という言葉が文獻の中に出てくるようになったのである。

その中で用例の数が最も多い作品は『榮花物語』で、100例もある。その次が『源氏物語』で53例、『源氏物語』以後の『大鏡』には7例、『今昔物語集』に8例見られる。他には『枕草子』に6例、『紫式部集』に2例、『紫式部日記』に6例、『讃岐典侍日記』、『蜻蛉日記』、『宇津保物語』、『浜松中納言物語』に1例ずつ見られる。物の怪は病氣や死などをもたらす恐ろしい存在として作品の中に描かれているが、作品や作家によって描寫の仕方や役割などが違うので非常に興味深い。

中でも隨筆や日記の中に用例が見られるのは『枕草子』に6例、『紫式部日記』に6例、『讃岐典侍日記』に1例、『蜻蛉日記』に1例である。もちろん、物の怪という言葉を使っていなくても、御靈や怨靈などの話は作品の中はかなり出てくるし、それはすべて考察の対象になる。しかし、様々な女流自照文學を考察してみた結果、實際物の怪という言葉が使われている場面だけ物の怪と関わりのある話が見られるので、今回の考察では實際用例が見ら

---

\* 韓國傳統文化學校 助教授 日本古典文學及び民俗學

れるこの四つの作品を対象にして考察してみたいと思う。

## 2. 女流随筆文學に見られる物の怪の用例考察

平安時代の女流随筆と言えば、『枕草子』がある。周知の通り、『枕草子』は清少納言が中宮定子に仕えていた当時の日常生活や、そこに集まる女房たちの興味や感想を代辯して書いたものである。そのため、この作品を通じて、当時の女房たちの考え方や文化などを詳しく知ることができる。当然『枕草子』は、物の怪に対する当時の認識や考え方などを知る貴重な資料でもある。先述したように『枕草子』には6例の物の怪の用例が見られるので、これから『枕草子』に出てくる用例の本文と内容を見ていきたいと思う。

一番最初に「物の怪」という言葉が見られるのは、第23段の「すさまじきもの」の段である。

験者の、物の怪調ずとて、いみじうしたり顔に、獨鉈や數珠など持たせ、せみの聲しぼり出だしてよみるたれど、いささか去りげもなく、護法もつかねば、あつまりる念じたるに、男も女もあやしと思ふに、時のかはるまでよみ困じて、「さらにつかず。立ちね」とて、數珠取り返して、「あないと験なしや」とうち言ひて、額より上ざまに、さぐりあげ、缺伸おのれよりうちして、寄り臥しぬる。いみじうねぶたしと思ふに、いとしもおほえぬ人の、おし起こしてせめて物言ふこそ、いみじうすさまじけれ。(60頁)<sup>1)</sup>

ここでは、病氣平癒の祈禱をする修験者の様子がよく描寫されている。「護法」とは護法童子のことで、佛法のために使われる鬼神である。この護法童子がよりましに乗り移ると、物の怪が退散して病氣が治るのであるが、ここでは物の怪が少しも退散しそうな様子がない。それにもかかわらず、この祈禱の全責任を負っている験者は、誰よりも先にあくびをしたり、自分から先に立って、何かによりかかって寝てしまったりする人である。無責任で頼りない修験者の話で、清少納言はそれを「いみじうすさまじけれ」と批判している。

第26段の「にくきもの」の段には、

にはかにわづらふ人のあるに、験者もとむるに、例ある所になくて、ほかにたづねありくほど、いと待ち遠に久しきに、からうじて待ちつけて、よろこびながら加持せさするに、このごろ、物の怪にあづかりて困じにけるにや、ゐるままにすなはちねぶり聲なる、いとにくし。(65頁)

---

1) テキストは小學館の新編日本古典文學全集本を用いた。

このように急病の人がいる時、當時は誰よりも先に修験者や僧侶を探し求めたことが分かる。當時の人が病氣を物の怪のしわざと考え、それを治すためには、薬や醫者よりも修験者や僧侶の加持祈禱にすぐ頼ったという話は、平安時代の作品の中に多く出てくる。ここではなかなか見つからなかった修験者をやっと待ち迎えて、加持祈禱をさせたのに、疲れているせいか、座ったと思うとたちまち讀經が眠り聲になっている。

これは先述した第23段の無責任な験者の話にも似ている。當時は修験者にもいろいろな人があったはずで、清少納言だけではなく、このように無責任な験者に腹を立てた人も多かったと思われる。

第151段の「苦しげなるもの」の段には、

こはき物の怪にあづかりたる験者。験だにいち早からばよかるべきを、さしもあらず、さすがに人笑はれならじと念ずる、いと苦しげなり。(276頁)

これは、手強い物の怪の調伏にかかっている験者の話である。祈禱の効験もなく、それでも人の笑い者にはなるまいと一生懸命祈っている験者の様子がよく描寫されている。

自分の加持祈禱によって人の病氣を治さなければならないので、修験者の責任はかなり重い。物の怪が早く退散し、病氣が治れば良いが、現代の常識から考えると、物の怪が退散して病氣がなおる確率よりそうではない確率ももっと高かったはずである。それを人々は物の怪が手強いので退散できずにいると思っていたのであるが、物の怪が退散しなかった場合、その修験者は無能であると人に笑われたり非難されたりするので、ここに登場する修験者は、そうなるまいと必死になっているのである。

次は、第181段の「病は」の段である。

病は胸。物の怪。あしの氣。はては、ただそこはかたなくて物食はれぬ心地。(318頁)

ここで、病のことを物の怪と言っているところに注目したい。物の怪は本来、物の怪が原因とされる病氣そのものを指す言葉であった。それがだんだん病氣をもたらす原因となるものを物の怪として認識するように変わっていくのであるが、『枕草子』のこの本文も當時では病氣それ自體を、まだ物の怪と呼んでいたということが分かる重要な資料である。

本文の「胸」は、胸のあたりの痛み、すなわち胸病を言う言葉で、心臓、胃、肝臓の病氣などを指す言葉である。「あしの氣」は現代の用語で言えば、脚氣病のことであり、「ただそこはかたなくて物食はれぬ心地」は何となく気分が悪くてものが食べれない軽い症状の病氣を言う。ここでは病を指す言葉としてこれらのような病氣の名前と別に物の怪があげられているが、平安時代に書かれた他の文獻を見ると、胸病とか脚氣病、軽い病氣などと

物の怪が完全に別のものではなく、かえってこれらの病氣を代表するものとして使われていることが多い。つまり、当時はすべての病氣の症状に物の怪という言葉があてはまり、まさに病氣の代名詞のようなものであると言える。また、第181段の本文のように病氣自体を指す言葉ではなく、病氣をもたらす怨霊や生霊などを指す言葉としても使われていたのである。

次は1本23段の「松の木立高き所の」段で、ここの本文には物の怪の用例が二つ出てくる。ここには、物の怪退治の状況が非常に詳しく描寫されているので、当時の物の怪の様子を知るためにも、大變参考になると思う。従って、少々長い感じはするが、この段の本文をすべて引くことにする。

松の木立高き所の、東南の格子上げわたしたれば、涼しげに透きて見ゆる母屋に、四尺の几帳立てて、その前に円座置きて、四十ばかりの僧の、いと清げなる、墨染の衣、薄物の袈裟、あざやかなる装束きて、香染の扇を使ひ、せめて陀羅尼をよみるたり。

物の怪にいたうなやめば、うつすべき人とて、大きやかなる童の、生絹の單衣、あざやかなる袴、長う着なしてゐざり出でて、横ざまに立てたる几帳のつらにゐたれば、とざまにひねり向きて、いとあざやかなる獨鈷を取らせて、うち拜みてよむ陀羅尼も、たふとし。

見證の女房あまた添ひみて、つとまもらへたり。久しうもあらで、ふるひ出でぬれば、もとの心失せて、行ふままに従ひたまへる、佛の御心も、いとたふとしと見ゆ。

せうと、従兄弟なども、みな内外したり。たふとがりてあつまりたるも、例の心ならば、いかには恥づかしとまどはむ。みづからは苦しからぬ事と知りながら、いみじうわび泣いたるさまの心苦しげなるを、つき人の知り人どもなどは、らうたく思ひ、け近くみて、衣ひきつくろひなどす。

かかるほどに、よろしくて、「御湯」など言ふ。北面に取り次ぐ若き人どもは、心もとなく引きさげながらいそぎ來てぞ見るや。單衣どもいと清げに、薄色の裳など萎えかかりてはあらず、清げなり。

いみじうことわりなど言はせて、ゆるしつ。「几帳の内にありとこそ思ひしか、あさましくもあらはに出でにけるかな。いかなる事ありつらむ」と、はづかしくて、髪をふりかけて、すべり入れば、「しばし」とて、加持すこしうちして、「いかにぞや。さはやかになりたまひたりや」とて、うち笑みたるも、心はづかしげなり。「しばしも候ふべきを、時のほどになりはべりぬれば」など、まかり申しして出づれば、「しばし」などとむれど、いみじういそぎ歸るところに、上臈とおぼしき人、簾のもとにゐざり出でて、「いとうれしく立ち寄せたまへるしに、堪へがたう思ひたまへつるを、ただ今おこたりたるやうに侍れば、かへすがへすなむよろこび聞えさする。明日も御いとまのひまにはものせさせたまへとなむ言ひつつ、「いと執念き御物の怪に侍るめり。たゆませたまはざらむ、よう侍るべき。よろしうものせさせたまふなるを、よろこび申しはべる」と、言すくなにて出づるほど、いと驗ありて、佛のあらはれたまへるとこそおぼゆれ。

清げなる童への、髪うるはしき、また大きなが髭は生ひたれど、思はずに髪うるはしき、うちしたたかにむくつけげにおほかるなどおほくて、いとまなうここかしこにやむごととなうおぼえあるこそ、法師もあらまほしげなるわざなれ。(460~462頁)

これは、清少納言が物の怪によって悩む女主人の邸に招かれて、その病氣平癒の修法をする験者を中心に、僧侶の望ましい態度を描いた段である。

當然のことであるが、当時において修験者や僧侶はその効験のあり様によって、人からの待遇も評判も全く違ってはいたはずである。ここでは、物の怪がみごとに調伏されたようで、この祈禱を擔當した修験者はみんなに感謝されている。清少納言も、その験者の姿を「いと験ありて、佛のあらはれたまへとこそ、おぼゆれ」とまで表現している。

これは、先述した第23段、第26段の無責任で頼りない験者と、第151段の効験のない験者の描寫とはずいぶん違う表現である。第23段では「すさまじきもの」、第26段では「にくきもの」、第151段では「苦しげなるもの」と表現された験者であったのが、ここでは佛の化身かと思われている。

また、この本文には物の怪調伏の様子が具体的に記されているが、中でも特に「よりまし」というものについて詳しい記述が見られる。第23段の本文でも験者がよりましに「獨鈷や數珠など持たせ」てお経を讀んでいたという記述が見られるが、当時の加持祈禱においてよりましはなくてはならない重要な要素であったのである。この本文にも、修験者が物の怪にわび言などを言わせて放免したという記述があるが、これはもちろん物の怪の聲ではなく、よりましという一種の靈媒の聲である。

『源氏物語評釋』によりましに對する詳しい説明が見えるので、引いてみたいと思う。この説明を見ると、加持祈禱によってよりましの役割や重要性がよく分かる。

さて、験者は、靈物に感應しやすい靈媒としての童子(多くは童女)、すなわち「よりまし」を控えさせ、病人の側に祈禱の壇を設け、護魔をたき、陀羅尼や經を讀み、その法力によって病氣についている物の怪を「よりまし」にのり移す。「よりまし」は、靈物に感應すると、我を忘れ、靈物そのものとなって(心靈術や催眠術のように)泣きわめいたり、狂ったりして、自分はこういうもので、かくかくしかじかの理由でこの人にとりついたので、しかじかの事をしてくれれば去って行くというようなことを語る。物怪が去ると病人は氣分がよくなり、「よりまし」も正氣になるとというのが、祈禱のあらましである。<sup>2)</sup>

もちろん、場合によってはよりましが必要でないこともあったが、加持祈禱での物の怪退散になくなくてはならない存在であったのは確かである。

2) 玉上琢彌(1973.6)『源氏物語評釋(第二卷)』角川書店 p.398

以上『枕草子』の本文に描かれている物の怪について考察してみた結果、当時行なわれていた修法や加持祈禱の詳しい状況が確認できる一方、物の怪が実際登場するとか物の怪につかれた人自體の描寫よりは、その退治のため加持祈禱をする僧侶や修行者に對する話に焦點があるということが確認できた。

### 3. 女流日記文學に見られる物の怪の用例考察

先述したように様々な平安時代の日記作品の中に物の怪の用例が見られるのは『紫式部日記』に6例、『讃岐典侍日記』と『蜻蛉日記』に1例ずつである。まずは『紫式部日記』における物の怪の用例について考察してみたいと思う。

十日の、まだほのぼのとするに、御しつらひかはる。白き御帳にうつらせたまふ。殿よりはじめたてまつりて、君達、四位五位ども、たちさわぎて、御帳のかたびらかけ、御座どももてちがふほど、いとさわがし。

日ひと日、いと心もとなげに、おきふし暮らさせたまひつ。御物の怪どもかりうつし、かぎりなくさわぎのしる。月ごろ、そこらさぶらひつる殿のうちの僧をば、さらにもいはず、山々寺々をたづねて、驗者といふかぎりは残るなくまゐりつどひ、三世の佛もいかに翔りたまふらむと思ひやらる。陰陽師とて、世にあるかぎり召し集めて、八百萬の神も耳ふりたてぬはあらじと見えきこゆ。御誦經の使ひ、たちさわぎくらし、その夜も明けぬ。

御帳の東面は、うちの女房まゐりつどひてさぶらふ。西には、御物の怪うつりたる人々、御屏風一よろひを引きつぼね、つぼねぐちには几帳を立てつつ、驗者あづかりあづかりののしりるたり。南には、やむごとなき僧正、僧都かさなりゐて、不動尊の生きたまへるかたちをも、呼びいであらはしつべう、たのみみ、うらみみ、聲みなかれわたりにたる、いとみじう聞こゆ。北の御障子と御帳とのほさま、いとせばきほどに、四十餘人ぞ、後に數ふればゐたりける。いささか身じろきもせられず、氣あがりて、ものぞおぼえぬや。いま、里よりまゐる人々は、なかなかるこめられず、裳のすそ、衣の袖、ゆくらむかたも知らず。さるべきおとななどは、しのびて泣きまどふ。(130頁～132頁)

．．． (中略) ．．．

今とせさせたまふほど、御物の怪のねたみののしる聲などのむくつけさよ。源の藏人には心譽阿闍梨、兵衛の藏人にはそうそといふ人、右近の藏人には法住寺の律師、宮の内侍の局にはちそう阿闍梨をあづけたれば、物の怪にひき倒されて、いといとほしかりければ、念覺阿闍梨を召し加へてぞののしる。阿闍梨の驗のうすきにあらず、御物の怪のいみじうこはきなりけり。宰相の君のをぎ人に、叡効をそへたるに、夜一夜ののしり明かして、聲もかれにけり。御物の怪うつれと召しいでたる人々も、みなうつらで、さわがれけり。

(135頁)<sup>3)</sup>

これは中宮彰子がお産を向かえている時のことあるが、このように當時物の怪は人の弱り目に憑くものであると信じられており、特に女性の懐妊、出産などには必ず關わるものであった。そのため、お産などには加持祈禱をするための修驗者や僧侶などが、當然必要であったのである。

ここでも当然加持祈禱によりましが使われているが、物の怪の乗り移ったよりましが正氣を失い、靈物そのものとなるという話は、前にあげた『枕草子』の1本23段の本文にも出てくる。ここでは正氣を失ったよりましの着物の亂れを知人が直してやったり、正氣に戻ったその童女が、先の亂れた自分の姿を恥ずかしがったりしているのである。

同じく中宮彰子のお産については、『榮花物語』の「はつはな」巻にも詳しい敘述が見られる。一條天皇の中宮である彰子のお産を控え、數え切れないほど大勢の僧が呼ばれ、加持祈禱が盛大に行なわれる。

ほど近うならせたまふままに、御祈りども數をつくしたり。五大尊の御修法おこなはせたまふ。さまざまその法にしたがひてのなり有様ども、さはかうこそはと見えたり。觀音院の僧正、二十人の伴僧とりどりにて御加持まゐりたまふ。馬場の御殿、文殿などまでみなさまざまにしみつ、それより参りちがひ集るほど、御前の唐橋などを、老いたる僧の顔醜きが渡るほども、さすがに目たてらるるものから、なほ尊し。ゆゑゆゑしき唐橋どもを渡り、木の間を分けつつ歸り入るほども、はるかに見やらるる心地してあはれなり。心響阿闍梨は、軍荼利の法なるべし、赤衣着たり。清禪阿闍梨は大威徳を敬ひて腰を屈めたり。仁和寺の僧正は孔雀經の御修法をおこなひたまひ、とくとくと参りかはれば、夜も明け果てぬ。さまざま耳かしがましよう、け恐ろしきことぞ物にも似ざりける。心弱からん人はあやまりぬべき心地して胸はる。(「はつはな」398頁)<sup>4)</sup>

ここには、前述の『紫式部日記』の本文と一致する描寫が多く見られる。當時は、お産の時白い御帳に妊婦を移して、安産のために僧侶や驗者を集めて加持をさせていたのである。彰子は一條天皇の中宮であっただけに、そのお産の加持のために呼ばれた僧侶や驗者の數は相當なものであった。本文の最後の記述からも分かるように、當時は僧が多く集まれば集まるほど、大きい聲で讀經をすればするほど、効驗があると信じられていた。そのため、身分の高い人の加持祈禱の時は、大勢の僧が力いっぱい聲を張りあげて經を讀み、そのやかましきは竝大抵のものではなかったのである。

3) (1994)『和泉式部日記 紫式部日記 更品日記 讚岐典侍日記』小學館

4) (1995)『榮花物語』小學館

ここにも、「物の怪」の用例とともに、修法を行なう折の当時の僧の服装や祈禱の様子などが非常に細かく描かれている。しかし、お産の場面における物の怪に関する記述は、『紫式部日記』ほど詳しく描かれていない。『紫式部日記』にも、彰子のお産の場面における加持祈禱や周りの様子などがよく描寫されているが、これは『紫式部日記』には書かれていない場面である。

『紫式部日記』には、物の怪調伏のための祈禱や、周りの人達の様子、手強い物の怪を退散させるために修験者がてこずる描寫など、お産の場面が非常に詳しく描かれている。「物の怪」という言葉を繰り返して使いながら、紫式部はお産における物の怪の様子を執拗に描いており、彼女の物の怪に対する執着を感じさせる。『紫式部日記』のこのような描寫は、『枕草子』の1本23段とも似ているが、それよりもはるかに詳しい敘述である。

『紫式部日記新釋』にも、

御産所の修験祈禱の具體的な有様は、御産部類記やその他の公卿日記にも見られない描寫で、注目に値する。しかも、式部が作家としての眼を通して見ているだけに、事務記録に見られない迫眞力がある。<sup>5)</sup>

という指摘があり、『紫式部日記』の描寫の細かさがうかがえる。

私がここで注目したいと思うのは、この場面の描寫に異様なほどに、物の怪という言葉が繰り返して使われているということである。『紫式部日記』の中で、この場面だけで6例の物の怪の用例がすべて出ている。お産の場面の描寫に、物の怪という言葉をこれほど繰り返して使う必要があったのであろうか。

この部分は、紫式部が物の怪をかなり意識して書いているものであり、それほど作者にとっては非常に印象の強かった體驗だったと見てもいいのであろう。よりましに「物の怪どもかりうつし、かぎりなくさわぎののしる」のを見たり、お産が順調に進むのを「ねたみののしる」物の怪の聲を聞いたり、物の怪の移ったよりましに擔當の僧侶が「ひきたふされ」たりするのを、目の前で直に見た作者である。この場面の描寫からは、物の怪の存在を疑う気持ちなどはまったく感じられない。これはありのままの記録であり、紫式部が物の怪の存在を現實として、一つの實體として認識していたことを示している。

この一條天皇の中宮彰子の出産の場面は、『源氏物語』の葵の上の出産の場面を思い出させる。『源氏物語』の中に生き生きとしたすさまじい物の怪の話が描けたのも、このような日常生活の中での體驗がもとになっているのであろう。

次は、堀河天皇が病氣になって崩御するまでの経緯が詳しく述べられている『讚岐典侍日記』における物の怪に用例について考察してみたい。『讚岐典侍日記』によると、堀河天

---

5) 曾澤太吉・森重 敏(1980.5)『紫式部日記新釋』武藏野書院 p.43



皇は嘉承2年(1107)6月20日から気分がすぐれず、横になりがちだったが、7月6日から大變重態になったことが分かる。病氣はだんだん重くなっていくばかりで、まわりの人々は心配して、加持祈禱をさせたりする。

かく苦しいおぼしめしたれば、大殿油例よりも近く参らせなどするほどに、ただ消え消え入らせたまひぬ。「あな、いみじ」と泣きあひて、内の大臣、關白殿参り、つとさぶらはせたまふ。おほかた、ののしりあひたり。増譽僧正、頼基律師、増賢律師など召しにやりつつ、頼基律師、すなはち参りて、讀經み佛くどきまゐらせらるるほどに、しばしばかりありて、うち身じろきせさせたまふに、いますこしののしりあひぬ。讀經まるるを聞かせたまひて、「今は益あらじ。ただ驅り移せよ」とおほせられ出でたれば、ものつく者など召してゐて参り、移さるるおびたしきは、おしはかるべし。移りて、そのことはいはでかはめきののしるさま、いとおそろし。(394頁)<sup>6)</sup>

ここで物の怪を退散させるために登場しているのは頼基律師である。増譽僧正、頼基律師、増賢律師などの人呼び寄せたが、この場面でただちに参上して祈禱にかかっているのは頼基律師だけである。天皇は讀經しても効果がないはずだと、一気に物の怪を追い出してほしいと注文し、物の怪が移る者を探したりする。「移さるるおびたしきは、おしはかるべし」とあるように、結局物の怪がよりましに移って退散できたが、なぜ天皇に取りついたのか、誰の物の怪なのかというはっきりしたことはわからない。

しかし、『讚岐典侍日記』では物の怪が直接正體を現わす場面がある。様々な方法を使って病氣をなおそうとするが、その甲斐もなく天皇の様態が急變する。それで、増譽僧正などをただちに呼び寄せて加持祈禱をさせるが、天皇は胸に激しい痛みを感じ、體はむくみ、耳も聞こえなくなる。天皇はもう最期の時だと言うが、みんな一心不亂に祈っているうちに、いよいよ物の怪が現れる。

かやうに、いみじき人たちあまたさぶらひて、われも劣らじと祈りまゐらせらるるけにや、御物の怪あらはれて、隆僧正、頼豪など、名のりのしる人、あらはれさせたまうて、「一年の行幸ののち、また見まゐらせばやと、ゆかしく思ひまゐらすに、その徳なれば、おどろかしまゐらすぞ」といふを聞かせたまひて、「いかにも、この二三年、例さまにおぼゆることのあらばこそ、行幸もあらめ、近きほどだになし。この心地やみたらばこそは、年のうちにもあらめ」とおほらせらるるほどより、苦しげにならせたまひにたり。(408頁)

ここで物の怪として登場しているのは隆僧正、頼豪などである。隆僧正は園城寺の長吏

6) (1994)『和泉式部日記 紫式部日記 更品日記 讚岐典侍日記』小學館

であった僧であり、頼豪は同じく園城寺の僧であった頼豪阿闍梨のことを言う。頼豪阿闍梨は應徳元年(1084)5月4日入滅したが、白河天皇を恨んで憤死し、堀河天皇の兄にあたる敦文親王を取り殺したと言われる。このような霊たちが天皇に取りついた理由は先年の行幸の後また拜見したいと思ったが、その後その機会がなくて注意を促そうとしたということであり、天皇は病気がちで行幸ができなかったことと病気がなおたら年内に行幸をすると約束する。しかし、ここでは物の怪が現れたにもかかわらず、さらに病気が重くなっていったような様子になったと書かれている。結局胸病や様々な病氣を患っていた天皇は、7月19日崩御するようになる。当時物の怪は軽い病氣にも使われたが、文献に見られるのはこのように重い病氣や死に至らせたりする場合もかなりある。

次は『蜻蛉日記』における物の怪の用例を見てみたいと思う。

日ごろなやましうて、咳などいたうせらるるを、もののけにやあらむ、加持もころみむ、せばどころのわりなく暑きころなるを、例もものする山寺へ登る。(上巻・應和二年・125頁)<sup>7)</sup>

このような記事から、ちょっとした病氣や氣分のすぐれないことを、当時の人はすぐ物の怪のせいにしていたことが分かる。また、そのような物の怪を退治するためには、つまりその病氣を治すためには、加持をころみたり、山寺などに登って祈禱をさせたりしていたことがうかがえる。つまり、『蜻蛉日記』に記述されている物の怪は作者と特別な関わりをもっているわけではなく、ただ日常生活の中の軽い症状の病氣を指す言葉として使われているのである。

## 4. 結

以上考察してきたとおり、女流随筆の代表である『枕草子』の物の怪の用例の特徴とえば、物の怪が実際登場するとか物の怪に取りつかれた人自體の描寫よりは、その退治のため加持祈禱をする僧侶や修行者に對する話に焦點があるということである。無責任で無能力な僧侶もいるが、自分の力量を十分發揮し、人々から尊敬される僧侶もおり、これを清少納言は時には批判的な言葉で、時には譽める言葉で表現している。

このように物の怪の話をする時、物の怪自體より僧侶や修行者に焦點をあわせて描寫し、それについて批判しているのは他の作品では見られない『枕草子』だけの特徴である。

---

7) (2000)『土佐日記 蜻蛉日記』小學館

『榮花物語』や『源氏物語』、『大鏡』などに見られる物の怪は、大半が実際に物の怪が実際に登場し、場合によっては明確な動機や目的を持って人々に祟りをなしたり、病氣をもたらしたりしている。これは物語とは違う随筆ならではの特質と言えるが、『紫式部日記』や『蜻蛉日記』などを見ても僧侶や修行者に焦点をあわせて描寫することはない。つまり、これは『枕草子』だけの特徴なのである。

『蜻蛉日記』の場合は用例が一つしかないし、とても簡単な描寫で終わっているなのでその特徴について言うのは難しいが、當時物の怪に対する認識や對處の仕方についてわかる貴重な資料としての役割を果たしている。

『讚岐典侍日記』では、物の怪が堀河天皇の病氣と死に深い関わりを持って、實際正体をあらわして登場したりもしているが、『枕草子』と『紫式部日記』などに比べれば、加持祈禱や修行者などに焦点があるわけでもなく、だいふ物語に近い小説的な要素も加えられている。

『紫式部日記』の場合は實際物の怪が登場して人々に亂暴をしたりする場面を目に見える状況そのまま生き生きと書いている。平安時代に書かれた他の物語では恨みを持っているものやそれゆえ物の怪となり祟りをなすものなどに小説的な要素が加えられている場合が多いが、ここではそのような要素は一切見られない。紫式部が物の怪というものに強い印象を受け、大変執拗に物の怪に集中しながら描寫をしているが、平安時代に書かれた他の物語に見られる物の怪の描寫とは違って、目の前の状況をありのまま細々と記述することに努めている。

もちろん、目に見える状況をそのまま書き記すのは日記や随筆の特性上当然のことと言える。しかし、『枕草子』と『紫式部日記』では實際物の怪が登場する場面をありのまま、そして大変詳しく描寫しているが、それぞれの作者の感覺とするどい筆致で、同じ物の怪の話でも描寫の仕方や重点をおく對象に違いが見られる点は非常に興味深い。

また、これらの作品を通じて、當時の人々の物の怪に対する認識、それを調伏させる修驗者や僧侶などの役割、物の怪を退散させる時の状況などを詳しく確認でき、資料としての役割も果たしている。

## 【参考文献】

- ・ 玉上琢彌(1973.6)『源氏物語評釋 (第二卷)』角川書店 p.398
- ・ (1994)『和泉式部日記 紫式部日記 更品日記 讃岐典侍日記』小學館 p.135
- ・ (1995)『榮花物語』小學館 p.398
- ・ 曾澤太吉・森重 敏(1980.5)『紫式部日記新釋』武藏野書院 p.43
- ・ (2000)『土佐日記 蜻蛉日記』小學館 p.125
- ・ 紫式部(1992)『源氏物語』小學館 p.271
- ・ 日本文學研究資料刊行會・編(1976.9)『歴史物語一』(「日本文學研究資料叢書」) 有精堂 p.364
- ・ 服部敏良(1975)『王朝貴族の病狀診断』吉川弘文館 p.128
- ・ (1990.4)『民間信仰の研究下』(「櫻井徳太郎著作集 第四巻」) 吉川弘文館 p.78
- ・ (1962.7)『定本 柳田國男集』(第十巻) 築摩書房 p.276

K C I

## 要旨

本稿では女流自照文學作品に見られる物の怪の用例について、隨筆と日記に分けて考察してみた。平安時代に書かれた隨筆や日記の中に用例が見られるのは『枕草子』に六例、『紫式部日記』に六例、『讃岐典侍日記』に一例、『蜻蛉日記』に一例である。

女流隨筆の代表である『枕草子』の物の怪の用例の特徴とえば、物の怪や物の怪につかれた人についての描寫よりは、その退治のため加持祈禱をする僧侶や修行者に對する話に焦點があるということである。物の怪の話をする時、物の怪自體より僧侶や修行者に焦點をあわせて描寫し、それについて批判しているのは他の作品では見られない『枕草子』だけの特徴である。

『蜻蛉日記』の場合は用例が一つしかないし、とても簡単な描寫で終わっているのでその特徴について言うのは難しいが、當時物の怪に對する認識や對處の仕方についてわかる貴重な資料としての役割を果たしている。『讃岐典侍日記』では、物の怪が堀河天皇の病氣と死に深い關わりを持って、實際正体をあらわして登場したりもしているが、『枕草子』と『紫式部日記』などに比べれば、加持祈禱や修行者などに焦點があるわけでもなく、だいふ物語に近い小説的な要素も加えられている。『紫式部日記』の場合は實際物の怪が登場して人々に亂暴をしたりする場面を目に見える狀況そのまま生き生きと書いており、平安時代に書かれた他の物語に見られるような小説的要素は一切見られない。しかし、紫式部は物の怪というものに強い印象を受け、大変執拗に物の怪という言葉を繰り返して使いながら描寫しており、紫式部の物の怪への深い興味を感じさせる。

キーワード：物の怪、隨筆、日記、枕草子、蜻蛉日記、紫式部日記、讃岐典侍日記

투 고 : 2004. 11. 30

1차 심사 : 2004. 12. 11

2차 심사 : 2005. 1. 4

住 所 : (323-812) 충남 부여군 규암면 합정리 430 한국전통문화학교

電 話 : 041-830-7373(연구실), 010-3454-1267(휴대폰)

e-mail : sirayuki@paran.com